

医学部

I	教育水準	教育 4-2
II	質の向上度	教育 4-6

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、医学科と健康科学・看護学科では、教育年限が異なっている。医学科は基礎医学、臨床医学、社会医学を専門とし、4年間の後期課程の後、卒業すると医師国家試験受験資格を得ることができる。健康科学・看護学科は健康科学・看護学・国際保健学を専門とし、2年間の後期課程となっている。学生定員は医学科 100 名、健康科学・看護学科 40 名である。専任教員は医学系研究科と併任であり、教員数 259 名である。この他に学内の研究所、研究施設所属の教員 6 名と学外の 362 名が教育に当たっており、医学教育に求められる少人数教育や個別指導を可能としているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、カリキュラムの決定及び学生の成績評価は、毎月開催される 24 名の教員からなる教務委員会で行われ、また医学部の多様なカリキュラムに対応している。教員に対しては教育理念と体制について理解を深めるため、さまざまなファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動が行われている。こうした活動から出される提言は、教務委員会での検討を経てカリキュラム改革へと結実している。例えば、学生の自発性と創造性を引き出す目的で、少人数問題解決型学習や 3 か月間の「自由研究期間」の導入等がある。また、教育への貢献に基づき、これまで 8 名の教員に Best Teacher's 賞を授与している。機動的な教育改革をさらに進めるために、学部長の下に医学教育改革ワーキンググループを随時設置し、医学部の教育目的を達成するための大胆な教育制度改革について検討を進めた具体的成果の一つとして、PhD-MD コースがある。PhD-MD コースは、特に優れた能力を有する学部学生が、学部課程修了前に大学院に入学する制度を整備するという全学の目標に沿った活動として創設されているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

2. 教育内容

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、医学科の専門教育課程では、2年生冬学期から3年生（M1）までに医学に関する基幹能力を修得するため、「解剖学」、「生化学」、「生理学」等の専門基礎科目を必修科目として配置している。4年生（M2）からは、臨床医学の広範な領域において先端・専門的な知識を養うため、幅広い臨床医学科目を配置している。これらの学習の評価として臨床実習前共用試験（CBT及びOSCE）を行っている。5年生（M3）から6年生（M4）では、臨床医としての素養を身に付けさせるため、各診療科の臨床実習を行っている。これらを結ぶ取組として「基礎・臨床・社会医学統合講義」が注目される。健康科学・看護学科では、2年生後期から3年前期にかけて基礎科目を広く配置して健康科学・看護学全般への理解を深めさせている。3年生後期より楔形にコース別の科目を組み入れ、4年生から、健康基礎科学を学ぶ健康科学コースと、看護師・保健師・助産師の国家試験受験資格を取得する看護学コースの2コースになる。健康科学コースでは、実験医学と社会医学の両面から多様な教育を行い、看護学コースでは前述の3種の国家試験に関わる科目の講義と実習を行っているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、医学部に入学しながら、最初の2年間に医学に触れる機会がないという学生の意見を取り入れ、教養学部1年生に対して「医学に接する」ゼミナールを平成7年度から開始した。教員との懇談、講義受講、研究室・病院見学を行い、医学を身近に感じて医学に対する興味を一層高めることを目的としている。「主体的に何を学ぶか」を追求したいという学生のニーズに応え、平成13年度から開始した「基礎医学統合講義」では講義企画に学生を参加させている。また、要介護者への接遇を体験させるため、介護施設において1週間の介護実習を行っている。健康科学・看護学科では、近年の健康・予防に対する社会の要請の高まりと医療・保健・福祉の高度化・専門化・複雑化に対応して、教育課程を見直し教育内容を改善に努めている。さらに看護学コースでは、健康問題の変化に対応して、講義に加えて附属病院や老人保健施設、保健所等多様な施設での臨地実習を行っている。また、助産師資格取得のための選択コースを設置して、多様な実習を行っているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

3. 教育方法

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、医学科の授業は、講義と実習が交互に組み合わされ、講義で学んだことを実習で体験してさらに理解を深める構成である。また、5年生に対して2～3か月間行う診療参加型臨床実習は通常の見学型臨床実習と違い、指導医師の監督のもと医行為を行う臨床手技体験型の臨床実習である。後述の研究実習と合わせて毎年20名以上を海外の協定機関での診療参加型臨床実習に送り出している。また、研究者の育成が当該学部の重要な使命であることから、学生が基礎あるいは臨床医学の研究室を選択して研究を行う「研究室配属」や「自由研究期間」を各2週間（合計5回）、3年生から4年生に実施している。健康科学・看護学科では、2年生後期に学習の俯瞰を目的として「健康科学・看護学概論」を置き、3年生中盤には健康科学コースと看護学コースに共通の「保健学実習」を配置するなど、基礎的・一般的科目から専門的科目へと学習の順序性を重視するとともに、実習を有機的に組合わせて学習の効率を高めている。さらに、教員に加えて大学院生のティーチング・アシスタント（TA）を配置して学生実習等の充実を図っているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、医学科ではほとんどが必須講義実習のなかで、学生が自ら問題点を認識しつつ解決していくプロブレム・ベースド・ラーニング（PBL）を平成14年度から開始している。PBLや共用試験OSCE等のために、少人数グループ用のセミナー室を20室整備している。基礎統合講義では、4年生が5日分の講義の企画を行い、3～5年生が聴講する。3～6年生全員に対し、教員によるチューター制度を開始し、学生5名に教員1名を割り当て、学生の相談指導を細やかに行うシステムを構築している。研究室配属や自由研究期間を経験したあと自主的に研究室に出入りして学会発表や論文執筆を行い、その後研究を目指す学生が各学年に数名いる。健康科学・看護学科では学生を課題に対して能動的に取り組ませ、学生の科学的思考力を育て、エビデンスに基づく発想の涵養のために実習を重視してきた。優秀な卒業論文に対して学科賞を与えるなど、学生が意欲を持って主体的に学習に取り組めるように工夫しているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

4. 学業の成果

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、医学部医学科では専門科目のほぼすべてが必修である。全必修科目に合格したものが卒業資格を得る。卒業率は常に進学生の約95%以上であり、卒業生のほとんどすべてが医師国家試験を受験し、合格率は常に90%以上である。医学部健康科学・看護学科は卒業には必修60単位、選択24単位以上、合計84単位以上の履修が必要である。同学科卒業生のうち大学院修士課程等への進学者は50～60%、就職するものは20～25%であり、大学院進学者が多い。これは、当該学科が、健康科学や看護学、国際保健学の幅広い領域の研究者養成あるいは実践リーダー養成を目標としていることによく一致している。また、看護学コース履修者は全員が看護師、保健師の国家試験を受験する。また、助産師課程を選択した学生はその試験も含めて受験し、例年ほぼ全員が合格しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、平成20年のアンケート調査では、教育内容全般に関して学生の満足度は極めて高かった。これに先立ち行われた平成19年度の学生による「医学科臨床実習の評価―第5回 M4の学生に対するアンケート調査の集計―」では、腫瘍血管外科、耳鼻咽喉科、救急医学等の科目が、熱意やわかりやすさ等で高い評価を得ていたなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

5. 進路・就職の状況

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、医学科では毎年約100名が卒業し、その90%以上が医師国家試験に合格する。合格者のほぼ全員が初期臨床研修を受ける。初期臨床研修先は約4割が当該学部附属病院、約6割が都内及び近隣県の基幹病院である。初期臨床研修後、多くは当該学部臨床各科に所属し、専門（後期）臨床研修を受けている。平成19年に当該大学大学院・医学博士課程に入学した本医学科卒業生は59名、内訳は基礎医学系大学院8名、臨床医学系大学院51名であった。医学科卒業生の約6割が、臨床研修修了後に大学院に入学していることになる。また、基礎医学系大学院進学者が全国的に減少しているなか、当該大学に研究者養成を目的に設置されたPhD-MDコースには毎年1、2名の学生が進み、医学科卒業前に基礎医学系大学院に入学している。健康科学・看護学科からは、毎年30名前後が卒業し、そのうちの約5～6割の学生は当該大学あるいは他大学の修士・専門職学位課程に入学しているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「関係者からの評価」については、医学科卒業生は、当該学部附属病院の他に都内の有名基幹病院で採用され、初期臨床研修を受けている。さらに、卒業生全員がそれぞれ希望する研修病院に受け入れられているが、このことは初期臨床研修病院関係者からの評価の高さを裏付けていると推察される。健康科学・看護学科の卒業生の大学院修士課程から博士課程へ優秀な成績で進学する学生が多く、過去4年間は43～78%で推移している。健康科学・看護学科卒業生の大学院における過去4年間の論文発表数は英文・和文を合わせると一名平均2～3編に達しており、最近は英文発表が多くなっている。学会発表についても同様で、国際学会を含め1名当たり年数回発表しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は3件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。